通信第七十一号　智慧の光明からまる人生

帰命となってからは、仏様と私の関係が変わるのです。私に対立して仏様を考えるのではありません。対立が摂取に変わるのです。仏様は生きておられるからこそ衆生を救済してくださるのです。仏様は絶対の智慧（光明）です。絶対の智慧ですから、対立している私を包んでくださいます。絶対の智慧から慈悲が現れて、対立に閉じこもっている私に、親のみ心を知らせたいと願われるのです。その慈悲が具体的に活動に現れるのを方便と申されます。この智慧と慈悲と方便とが、と溶け合って活動してくださっているのがご名号なのです。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　書信６４信―９

このご文章を幾度拝読させて頂いたか知れません。しかし、読めていなかったのです。だから二回や三回読んでわかる世界ではありません。「江本の文章は門徒さんにはわからん」同級生のお言葉です。一面そうだろうなと私も思わされます。「小学校４年生でもわかる表現をすること」と言われて、それも否定できません。かみ砕いて、かみ砕いてお伝えするのもこれからの私の仕事であります。

先日、法友の方からのお便りで気にかかるお言葉がありました。

　私は正しい。その思いから人を裁いている事に気づかされ、昨夜は眠れずに苦しかった。常にその心で人と接しているのかな。助けて下さい。お念仏です。

すぐに返信を書かされました。

　環境のせいもあって、私は小さい頃から内向的、自虐的性格でずいぶん悩み苦しみ、したがって暗かったのです。夜は不眠症でした。天上の木目の模様がいろいろ奇妙に見えたり、鳥の声におびえました。青年になると人間関係が嫌いになり一人で山や川に行きました。

　　大石先生にご本願の世界そして滅度の世界をお教え、お育ていただいて、お念仏一つで何もかも消して下さるように成らされました。

　　今はあの大きな苦があったればこそ。と、如来さまの大慈悲のご恩を深く感じさせられています。

親鸞さまは「無始以来の苦においては、二三の水滴のごとし。滅すべきところの苦は大海の水

のごとし」。との教えを引用されています。慶びが海のごとしではなく、二，三の

苦しみはあっても、のぞかれた苦しみは海のごとし。という表現に実感がこもっています。

さて、毎日戦争と政治の腐敗のニュースが流れ気持ちが落ち込んでしまう人もありましょう。

ニュースキャスターも大谷選手の話題の「こういう話題だと心が晴れます」と思わずらされたのも同感するところであります。

釈尊は「苦」という問いを問題にされました。先日、ベラルーシのスラーバさんからリモート法座の時、ご質問がありました。「を浄土真宗では説いているのですか」私は「説いています」とお答えしました。四諦とは、苦諦（この世は苦しみに満ちているという真実）、（苦しみの原因は煩悩にあるという真実）、（苦しみがするという真実）、（苦しみを滅するために正しい方法があるという真実）です。

私は滅度ということを大石先生から聞かせていただいたとき不思議な気がしました。藤谷秀道先生が「教行信証の証巻はこれからだ。これまで行巻、信巻までで一杯だった」と仰せられていたことが心に残っていたからです。確かにそれまで滅度というお教えはほとんど聞かなかったことでした。しかし、親鸞さまは証巻の初めに

　にするがゆえに、必ずに至る

と言い切られておられます。

　蓮如上人は信心のお文の中で

　　されば無始以来つくりとつくる悪業煩悩を、残るところもなく、願力不思議をもって消滅するいわれあるがゆえに、正定聚不退のくらいにすとなり。

　滅度は肉体が死んでからの世界ではありません。我執が滅せられた世界であります。そして

そこが帰る世界となり、はじまりの世界です。法蔵菩薩さま誕生の世界です。私は夜寝るとき、

しばらくお念仏しています。いつの間にか寝ています。朝、目が覚めると昨日のことが頭をよ

ぎります。お念仏のないときはいつまでも過ぎたことにとらわれ、引きずっていました。「ああ

この迷いにとらわれ、自分で自分にだまされていたんだ」とお念仏と共に立ち上がり、前進さ

されます。生活の中、仕事の中でもそういう連続です。だから、忙しい中を精一杯全力投球さ

せて頂けます。寝ても覚めてもいのちのある限りは称名念仏さされます。

大石先生の「光あり」の歌の中には「法蔵菩薩は光といのち」というお言葉があります。

　親鸞さまの「正信偈」の初めには

無量寿に帰命いたします

　　　不可思議光に南無いたします

光のいのち（仏様の慈悲）と人間の思議を超えた光（仏様の智慧）のはじまりです。光の命の誕生でありますから、帰命された人は明るくなるはずです。では、法蔵菩薩さまはどのようなおはたらきをなされているのか。

親鸞さまが十八願のみ心を信の巻に詳しく説いて下さっています。くどいようですがしばらく辛抱して読んでください。如来さまのみ心、十八願（、、）をおおざっぱにさせて頂きます。時間が無くて丁寧でなく申し訳ありません。

、私どもが無始より今日、今の時に至るまで、にして清浄の心はない。りばかりで真実の心が無い。だからこそ、如来さまが法蔵菩薩となって私どもの身、口、意の業の中にりって、無始よりこのかた今日、今に至るまでどんな瞬間でも休むことなく清浄で真実の心でご修行をして下さり、さわりのない、説くこともできない功徳を私達凡夫ににどうでもこうでもして与えようしておられる。そのお心を具体的にかたちにあらわしたのが至徳の尊号である。

、私どもが無始より無明の海に流転し、無明を無明とも知らずに同じちをしては迷い、沈み、苦しみから抜け出せない、あわてて偽りの善や行をして光明土へ至ろうとする。しかし、それでは決して生まれることはできない。だからこそ、如来さまの大慈悲心から法蔵菩薩と下がられて私の身、口、意の三業の中で浄土に生れる因を与え、さわりのない広大の浄信を与えられた。「大経」には諸々の衆生が如来さまがお名号と成って下されたお心が届いて信心歓喜が起こった。

他力の信心はすこやかで楽しい世界です。かたぐるしいのは自力が入っているからではないで

しょうか。「正信偈」には

　　煩悩の林に遊びて神通を現じ、生死のに入りてを示す、といえり。

とあります。大変な境地ですが、遠くにしていてはいつまでたっても堂々巡りで一生が過ぎて

しまいます。

　、私どもが煩悩の海に流転し、生死の海に漂い沈んで、真実に浄土へ向かう廻向の心が無い。清浄に浄土へ向かう心が無い。だからこそ、苦悩の私どもを救わんとして、無始より今日の今まで法蔵菩薩が私どもの身、口，意の三業の中で如来の大慈悲心を届けるために働きづめである。この欲生心が届いた文を「大経」には、至心に廻向したまえり、かの国に生れんと願ずれば、すなわち往生を、不退転に住せんと。ただ五逆ととを除く、と。

ここで、注意されることがあります。帰依したら五逆はなくなる、誹謗正法は消えてしまうと

軽く受けとってしまいます。ところがいよいよ深く自身の法を盗む在り方、法に逆らう姿が照

らされます。それが如来さまのご廻向と知らされますといよいよ有難く、ご恩報謝のお礼の念

仏が出て下さるのです。ここのところを大石先生にお育て頂きました。そのご恩は言葉にでき

ません。先生に如来さまにご身労をおかけした関所であります。

昔の同行さん方は如来さまを親様と呼ばれました。救われてみれば親様に多大なご苦労をおかしたとそのご恩を感じずにはおられなかったのでしょう。現代でもこの事実は生きています。

さて、もう一つ苦について、釈尊の教えとして、という教えがあります。苦しみをかかえていたゴータマシッダールタ太子（仏になる前の釈尊の呼び名）は、苦しみから抜け出すために城壁から外に出ました。最初に東の門から出て老人を見ます。「あなたも老いますよ」と言われて失意にくれます。次に南門から出ると病人を見ました。「あなたもいつかは病気になります」次に西の門から出ると葬儀の列に会いました。「あなたも必ず死にますよ」と言われて失意のどん底に落とされます。そして、最後に北の門から出ての老いてなお姿を見て「あのようになりたい」という願いを起こされて出家を決意した。と言われています。とは出家者の事です。その沙門はよほど崇高なお姿とご尊顔をされておられたに違いありません。

「大無量寿経」には、釈尊がお覚りを開かれてご説法されるお姿に感動された阿難尊者が

し姿色清浄にして光顔巍巍とまします。

とあり、さらになぜそのようになったのかを説くために、自分が発心したとせずに、釈尊のお心に現れた法蔵比丘が世自在王仏さまをえ、願いを起こされるという他力回向の深い思し召しが説かれています。

として、きわまりましまさず。～～

如来の、世に超えてともがらなし。

　私は人間である大石先生のお姿、ご尊顔の上にこの事実と通ずる世界が近づけば近づくほど感じさせられました。そして、ご本願が信じられるように成らされたのです。日々、年々このご恩の慶びが深められていることであります。そのご恩は親や先祖、家族、周りの方々と広がる事であります。

　二十八日の朝、散歩に出かけました。太陽が遅くるためでしょう。しばらく月と日の出を楽しみました。景色の色がだんだんと色づいて開けて来ます。な時間でした。

　　　年の瀬に　月と朝日を楽しめり

　　　　　　　　　　　　　　　　常照

この度もこの通信をもって年賀状とさせて頂きます。令和六年もお育ての事、何卒よろしくお願い申し上げます。

　令和五年十二月二十九日

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　常照　拝